



陰：広島アカシア上幹事の慰労で京都へ連れて行ってあげよう。

加：何か怪しいですねえ。

陰：ええところ連れて行ってあげるよ。

加：ますます怪しいなあ。

陰：悪いことにはせんけえ、おいでや。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆
ということで今回は、高志の国文学館館長で、万葉集の研究第一人者でいらっしゃるアカシア 38 回の中西進さんに話を伺ってきました。

.....
陰：本日は大変にお忙しい中、お時間を頂戴しましてありがとうございます。

中：ようこそ京都までお越しくださいました。アカシアの方が我が家を訪ねて来てくださるのは初めてです。

陰：附属のご出身でいらしたのですね。

中：大変良い学校で日本中から生徒が集まっていました。私は父の赴任で広島にいましたが東京の中学に進学予定でした。ところが小学校の先生にぜひ附属を受験してほしいと言われ、専心寮に寄宿して2年ほど在籍していました。いま思ってもあの2年間附属で学べたことは本当に私の宝です。

加：そうですか。

中：皆さんのように平和な時代に学べると日常のことは全て平穏と思いますが当時は日常が混乱でした。その中でいかに平静を獲得するか。あの時代に自由教育を謳う学校で教育を受けられたのは、私の人生観に大きな影響をあたえました。政府の言うことに反抗など絶対にできないのに、先生方が戦争を拡大する世の流れに抗っていらした。反抗したら死刑だって有り得たのですか

ら、本当にすごいことだと思いますよ。

陰：そうですね。

中：例えば胸に名札をつけなくちゃいけなかったのですが「当局により名札をつけなければならなくなったが校内だけにした。学校の外に出たら外して胸ポケットに落とせ」と仰いました。自分の名前を晒して街を歩くことは卑しいことです、と。そこで初めてそういう倫理観に出遇いました。

加：それはすごいですね。

中：あれからずっと考えていたのですが、今思うのは、何の何某だぞ、と名前を掲げて街を歩くとろくなことはない。俺は軍人だぞとか、俺は偉いんだからどけどけ、とか。すべての人が善良な一人一人の市民であれば良いので、明らかに差別です。だから未だに私の嫌いなものが強制です。こんにやくも嫌いです（笑）

加：こんにやくがお嫌いですか。

中：こんにやくは嫌いだけど許せる（笑）でも許せないのは、強制です。自由に個性を伸ばすということが人間の成長ですよ。そんなこともこの学校で教わりましたね。

陰：学校生活はいかがでしたか。

中：土曜日に半ドンで終礼が終わったら図書館で本を借りられました。当時流行っていた吉川英治の宮本武蔵を走って行って借りました。争奪戦でしたね。

加：本のない時代ですからね。

中：そうでもなかったですよ、皆さんご存知ないかも知れないけど。太平洋戦争は1941年から4年間ですが、43年まではほとんど平時と変わりませんでした。ところが44年に急激に物資が乏しくなり、45年には食べ物がなくなって。終戦直前は一日分の配給はほんのわずかでした。中指くらいのサツマイモ一本で1日分です。みんなが耐え忍んでいました。広島で小学6年の時に開戦しましたが、そこまで窮したのは敗戦前の2年間だけです。それまでは戦争の実感が全くありませんでした。でも、あっという間にどうしようもない状態で戦争の実感が迫って来ました。それは怖いことです。ともかく戦争の前半、まだ良かった時代をここ附属で過ごせ



Profile

1929年東京都生まれ。アカシア38回生。1962年東京大学大学院博士課程修了（文学博士）。高志の国文学館館長、国際日本文化研究センター・京都市立芸術大学各名誉教授。1994年歌会初召人。1963年読売文学賞「万葉集の比較文学的研究」、1970年日本学士院賞「万葉集の比較文学的研究」・「万葉史の研究」、1990年和辻哲郎文化賞「万葉と海彼」、2010年菊池寛賞「万葉みらい塾」。2004年文化功労者顕彰、2005年瑞宝重光章、2013年文化勲章。

たもんですから、強制は嫌いだなんてことも言えたわけです。

加：強制されて拒否などできない世の中でしたでしょうか。

中：そうですよ。周囲が全て軍事色に塗りつぶされていく中、昔ながらの良質な教育の砦だったのが附属で、砦に守られた2年間を過ごせたのです。世の中が暗闇と化していく中、ポツと灯りが残っていた学校でしたね。附属の人は、今でも誇りというものを持っていますか？

加：附属の卒業生はきっとお持ちだと思います。

中：良いことです。誇りという砦があれば、人間は真っ直ぐ生きられます。右へ倣えて流されているのは、自分の責任を取りようがないからです。

陰：附属から進学されてからの思い出を挙げるとしたら何でしょうか。

中：そうですね、今年初めに亡くなられた梅原猛さん、名古屋の旧制東海中学から第八高等学校を経て京都大学へ進学されたのですが、途中で他所へ入った学校をやめて一年間浪人されての進学でした。その一年間は広島の高専師範の一年生に入っていたら

岩国市でヘルスケアに取り組もう

多様な側面を持つ15万小都市で顔の見える総合診療が経験できます

広島のベッドタウン

日本最初の石油化学コンビナート

農業地域・漁業地域

米軍基地・観光地



公共交通が充実して学会出張にも便利
福岡まで1時間
広島まで1時間(新幹線なら20分)
東京まで1時間半
大阪まで2時間

岩国市アカシア医会

沖井洋一(42) 庄司孝・庄司利枝(44)
小林元壯(61) 小野良策(66) 杉原順二(70)
安陵成浩(74) 横峯和典(80) 沖井明(81)

たんですね。よくよく考えたら私が中学一年で入学した時と同時でした。その梅原さんに京都へ来ないかと誘われて国際日本文化研究センターに就職したのですから、ご縁があったんですね。実はこの家の表札は梅原猛さんに書いていただいたものです。悪筆で有名でしたけど、それがよかった。いろんな因縁があるもので、お二人が今日こうして来てくださったのも、そうですね。

加：今日はぜひ万葉集についても伺いたいと思います。最初に万葉集に興味を持たれたきっかけは何ですか。

中：子どもの頃からという訳ではなくて、東京の中学に転校したら、国語の先生が万葉集を教材にして歌を教えてくださいました。当時、私は歌そのものではなくて作者というか、その名前、山部赤人とか高市黒人とか、名前に最初に興味を持ちました。だからあまり上等な関心の持ち方ではなかったのですよ。で、先生が何か質問はないかとおっしゃいましたので名前について尋ねたところ「さあ、それは俺にもわからん」と。附属ではなかったですけど、偉い先生だと思います。本当に何も知らなければ、俺は知らん、とは言えないわけですよ。バカにされますからね。日頃きちんと知識なり教育なりで尊敬されていれば、知らん、と言えますよ。もし私がいま「赤人とか黒人ってどういう意味ですか」と訊かれても、定説はありませんから、一説ではこうです、としか答えられない。当時先生もそんなお答えはできたでしょうが、わからん、とおっしゃったことに尊敬の念を抱きますね。

陰：なかなか言えないでしょうね。

中：私は本当に良い先生に恵まれてきました。大学で人格を慕えるような先生が万葉集がご専門だったのです。その先生に卒業論文をみていただくと思ったことが万葉集との出会いと言ってもいいでしょう。

加：万葉集の中で好きな歌や好きな歌人はいらっしゃいますか。

中：まさに令和の序文を書いた大伴旅人、この人は素晴らしい人ですよ。一番素敵ですね。歌の良し悪しではなくて、生き方が、です。大伴氏というのは名

門なのですが新興貴族の藤原氏に圧されて劣敗側でした。そういう状況下にあると大抵は僻むのですが、僻まなかった。醜い権力闘争に私は加わらないと宣言をしていました。彼は九州に左遷されましたが、当人は左遷だとは思わないのです。同じように太宰府に遣られた菅原道真は、もう不満一杯でしたけどね。

加：東風吹かば・・・ですね。

中：そうそう。不満を言ったところで何も良くならない。ではどうするかというと、出世するとか不遇だとかいうことを超えて生きること。それに旅人は専念していたのです。

陰：へえー。

中：旅人よ、お前は藤原氏に降伏するのか、協力するのか、どちらにするの



だ、と聞かれていることの返事のような書簡を送っています。私は悠々と生活をしております、役に立つとか立たないとか、ということを超えて。それは『莊子』にある故事に基づいています。莊子が弟子を連れて遊説していたら、あるところに木を切っている男がいて、その木こりが言うには、この木は立派な木で良い材料になるから切り出している、と。そうですね、と莊子は通り過ぎました。次にあるところで雁を御馳走しよう、美しく鳴かないから絞めたから、と言われました。食事を終えて弟子たちが莊子に尋ねました。先ほどの木こりは役に立つからといって木を切り倒しました。ここでは雁が役に立たないからといって絞められました。一体どうしたら良いのですか、と。莊子は答えました。役に立つとか立たないとかいうことを超えて生きなさい、と。この故事を引いて旅人は「雁木の間を出入す」と藤原氏に書いて送っているの

す。

陰：雁と木の間を、ですか。

中：旅人は、私は朝廷に組して藤原氏を倒そうというでもなく藤原氏の側に味方するのでもない、役に立つ立たないというのは私の生き方には関係ない、南海の孤島に生えている桐の木のように大空大海を見ながら生活をしている、と、その木に自分をなぞらえ、その木で作った箏を藤原氏に送りました。箏の添え状として先の故事を記して送っています。で、なぜ箏を送ったのかというと、中国の「知音之友（ちいんのゆう）」という言葉に基づきます。本当の友だちは、友だちの弾く箏の音をよく聴き分ける、というのです。

加：音色を聞き分ける、と。

中：箏を受け取った藤原氏の一人も、この箏の音を聞いて楽しめます、と返事をしているのです。藤原氏の中でも自分の気持ちの通じる人に、箏と手紙を送っていたのです。旅人は、得意淡然、失意泰然、という人なんですね。意を得ても失っても何もなかったかのように過ごすのです。でも最終的には大納言にまでなっているのですよ。

加：直接表現するのではなく故事を引用して譬えて表現するのですね。

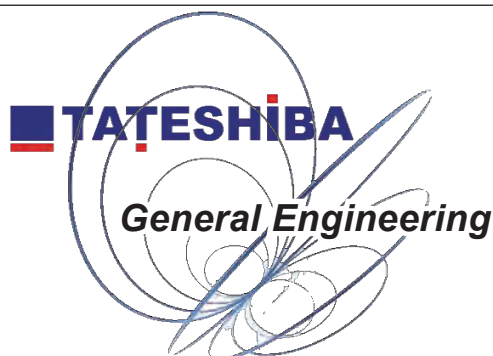
中：旅人は詩も絶品で、梅花の宴のときの歌も、「我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも」ですね、梅の花が散って、空から雪が流れてくるようだ、と。綺麗な風景ではないですか。自分の生き方を詠んでいるみたいです。雪が流れるように生きています、美しく生きています、と。

加：梅はパッと散りますね。

中：梅も桜も早ばやと散って5枚の花びらに分かれます。つまり生きていくエネルギーを分けて軽くする。合理的な生命活動の変化です。だから桜も梅も散ることについて何も悪いことはありません。

陰：そうなのですか。

中：何事も固定観念に囚われないことが大事ですね。たとえば令月の「令」ですが、良い意味しかないの、良いから命令されるのです。良い命令でなければ従わないですから。使役する、使われるというのも、良いことでなければ使われたくないですよ。良いことだ



株式会社 立 芝

代表取締役会長 向井 恒雄 (50回卒)

[Http://www.tateshiba.co.jp](http://www.tateshiba.co.jp)